

【目的】

近年、子どもの体力低下が問題となっている。文部科学省が全国体力・運動能力、運動習慣等調査を行い、昭和60年度と比べて現在の子どもの体力の低下を裏付けている。こうした状況にあるなかで、子どもの体力の低下に歯止めをかけようと様々な取り組みが行われている。文部科学省が作成する学習指導要領では、小学校と中学校において一度は減らされたものの再び体育の授業時間を増やしている。また、そのカリキュラムの中に体づくり運動という時間を設けて子どもの基礎体力を向上させようとしている。このように国が、現在の子どもの体力の状況に危機感を抱いて取り組んでいる。そうした状況にあるなかで、幼児、児童がどのように運動習慣を定着させていくことができるのか考えていく。その際、より現実的にこの問題を考えるために、現在の状況が社会的にどのような状態にあるかに触れていき、それに対してどのように対策を考えていくか考察する。

【方法】

本研究では、研究論文、調査報告、インターネットによる文献や資料、各協会ホームページから情報を収集し、検討、考察を行った。

【結果】

まず、学校の校庭の芝生化についてである。校庭に芝生があることによって、児童が校庭で遊ぶ割合や頻度が高くなる傾向があることが分かっている(田邊、三島、藤井 2008)。校庭に芝生があることによって、スポーツや外での遊びが活発になることが予想される。また、「じゃれ合う遊び」「遊ぶ」といった地面と接する運動の割合が増えることが分かった。このことから、芝生の校庭があることによって、普段から地面に接する運動が増加することが予測される。以上のことから、校庭を芝生にすることで、児童はより活発にダイナミックな動作の運動を行うことが多くなることが考えられる。また、校庭の芝生化によって児童の身体活動量や種類が増加していることが分かっている(上澤、加賀、下村、増田 2008)。以上のことから学校の校庭の芝生化は、児童の身体を使った活動を促進させる効果があることが分かる。また、その活動の内容もより大きく、ダイナミックに動くものや児童同士の接触する機会も増え、より多様な活動を自発的に展開させることができるようになることが明らかとなっている。

また、運動習慣の形成について欠かせないのが周りの大人の支えである。特に幼児に対しては周囲の大人の言葉かけや、接し方がとても重要になる。周りの大人の対応によって子どもは、運動好きにも運動嫌いにもなる。親や教師、地域スポーツクラブの指導者など様々な形で子どもと関わっている大人の連携が必要になる。そのためには、子どもの情報を提供しあうなどの密なコミュニケーションが必要になってくる。ただ、一斉に多くの子どもを指導している教師やスポーツクラブの指導者が一人一人の親と密にコミュニケーションをとるには現実的に難しい。そこで、どのように情報を共有するかの仕組み作りが求められる。

そして、子どもが運動に親しむきっかけとしての取り組みについてである。本論文では、野外活動とフラッグフットボールを取り上げた。他にも多くのプロジェクトや企画が全国で展開されている。こうした取り組みを行う時に一番重要なのは何を題材として扱うかではなく、対象とする子どもたちにとって一番効果的なものにするということである。野外教育で運動する喜びを感じて運動習慣が身に着く子どももいれば、全く何も感じない子どももいるだろう。一人一人の特徴にあった手段で子ども達にアプローチすることが重要である。

【結論】

本稿で示されたように、子どもの運動習慣を定着させるには子どもの周りの環境を提供する必要がある。校庭の芝生化については、今後研究がさらに研究が進んでいくが、子どもの運動習慣に対して効果的なことはすでに明らかになっている。各学校は校庭の芝生化を積極的に推進することが求められる。また、子どもの周りの環境についても今まで以上に配慮する必要がある。親、教師、地域の大人の積極的な交流が求められる。さらに、野外活動等の取り組みは今後学校や地域で積極的に取り組むべきである。特に野外活動は子どもを活動的にするので積極的に取り組んでいくべきである。